



成人期おける 個別支援計画と支援について

コンサルテーションサポート森の入口 金丸博一

大人になってからは、何を目指していくの？

・もっと周りの大人の言うことを聞いて、人に迷惑をかけず、できるだけ大人しくしている障害者を目指す？

⇒昔の障害者支援はそんな感じでした…。

・今もそういった考えが少なくないのですが、障害者虐待防止法や障害者差別禁止法といった法的な観点からは、合理的な配慮に欠けた支援と考えられます。

その人にとってのゴールは何でしょう。

・まだまだ障害者への偏見の多い世の中ですし、偏見によって、本人と家族は苦しみ続けなければなりません。働く場の提供をしている事業所であっても、ここは大丈夫だよ！ここでほっとしてね！といった支援を中心に置かなくてはいけないのが、日本の福祉の現状と言わざるを得ません。

障害者支援の仕事とは？

保育・教育関係の仕事と同様に人相手の仕事です。人相手の仕事で中心となるのは、**準備**です。

利用者の方と顔を突き合わせている時には、準備の成果が表れる時と考えてよいと思います。

支援のテーマは、コミュニケーションです。

作業内容や生活の流れにおける身支度や整容、整理整頓等や行事についても、利用者とのコミュニケーションを深めるためのきっかけでしかありません。

何を見て、何が聴こえているのかということに思いを馳せたいものです。

保護をする、お世話をする、手伝ってあげる、作業をさせるといった仕事ではありません。（仕事のノルマにもよりますが、本来は同じ内容の作業を黙々と、必死にやってはいけません。）

障害福祉関係の職務に就くからにはさらに知っておいてほしいこと

- ×戦前～戦後間もないころの日本における障害者の実態
- ×優生保護法(1948制定、1997改正で母体保護法に)により、強制的に不妊手術を受けさせられた障害者！手術の理由は、「遺伝性精神薄弱」！戦時中にナチス断種法をならい国民優生法成立、その優生思想は、今もなお国民の中に生きていることが相模原障害者施設殺傷事件で見えてきたこと！
- ×就学猶予ということが戦後50年たっても起きていたこと
- ×ハンセン病をめぐる差別問題に象徴される日本の人権感覚の貧困さと、今もなお根強い障害者への差別意識
- ×誰がどのように障害福祉を改善、前進に向けて成果を上げてきたのか。(当事者中心であり、合わせて家族の努力によるところが大きいという事実)
- ×現在もなお、「座敷牢」が存在していること。
- ×地域で生活する上で、障害があることにより、社会的な無理解から、困難さがたくさん生じている現実と、地域から排除されてしまうことが、乳幼児期から後期高齢者の時期までずっと続いている現実

障害福祉サービス事業所に従事するからには・・・

- ×障害福祉の歴史と現状のあまりに多くの負の面に、利用者とともに向かい合い、時には共に戦いながら、長い時間をかけて共に支え合うために、それを職業とする！という気概を持たないと勤まらないのではないのでしょうか。
- ×**地域との断絶を強いられている**のは、社会的な理解がないからであり、世界人権宣言の第一条である「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。」という言葉を常に噛みしめながら従事すべきではないのでしょうか。

事業所の中だけの利用者の姿を見ているだけでは、世間的な無理解、そこから生じる二次障害の実態は見てこないでしょう。

不快な刺激を取り除くことに、真摯に立ち向かうこと

- * 落ち着かない場所に座らされていないか？
- * 嫌いな物は残しても良いか？
- * 嫌いな人から離れられることが許されているか？
- * 同じことを何度も指示するスタッフはいないか？
- * 登所した時、昼食前後、休憩前、降所前といった時間帯にテンションが上がりやすいものだが、そうした時間帯のクールダウンに選択肢があるか？
- * トイレに長時間いることができるか？
- * 不安定な時ほど、協調することは難しいものだが、不安定な時でもいつも通りの目的を果たすように声をかけられていないか？

繰り返して経験すれば、理解することはできますが、慣れてくるといことがなかなかできないのは障害の特性によるものです。

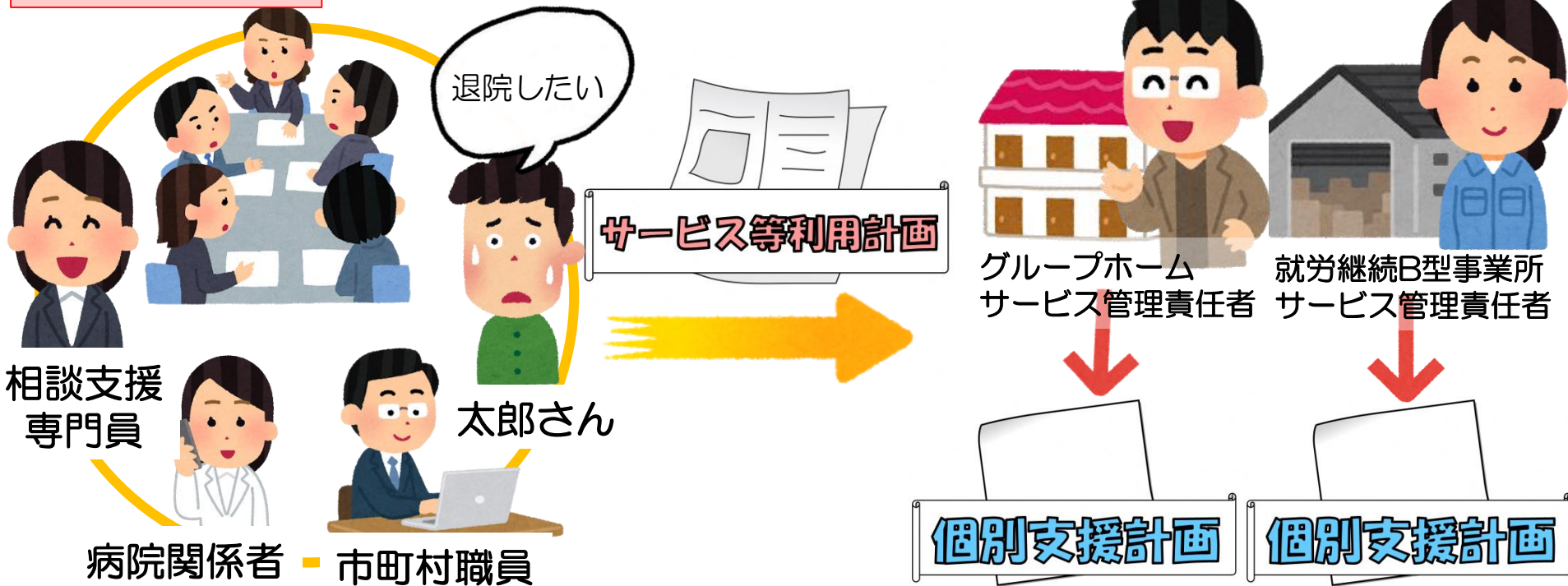
太郎さんを支えるサービス利用計画と個別支援計画の連携

太郎さんは、地域相談（地域移行支援）を利用して、20年間入院した精神科病院からグループホームに入居することを希望しています。退院後は、日中は就労継続B型事業所を利用しながら、自分の人生を取り戻していきたいと希望しています。



太郎さん

サービス担当者会議



太郎さんの地域生活を支えていくために、相談支援専門員は、トータルプランとしてのサービス等利用計画を作成し、2つのサービス提供事業所のサービス管理責任者は、個別支援計画を作成して、連携が取れたサービスが提供されるように調整・支援している。

利用者中心の支援を進めるために

1. 体験・経験不足



2. 情報不足・理解の困難や制限



3. 意思の表出手段の制限

・体験・経験の場の提供

- ・体験学習、体験利用、実習などの機会の提供(経験の拡大⇔安全の確保)
- ・社会生活カプログラムの実施
- ・失敗経験も時に要(但し見極めが必要)

・情報提供と理解の促進

- ・「本人の責任」に押し付けないためのメリット・デメリットの説明
- ・選んだサービスの目的と効果を確認

・選択が承認される経験

- ・「意思」を表明したいと思う動機づけ
⇒安心・安全でなければ心は開けない
- ・「選べる」といいながら「選ぶ」ものがない! ?を極力減らす。
⇒「あきらめない」「あきらめさせない」

・意思を表出できる環境・手段の確保

利用者中心の支援を進めるために

1. パワーレス状態 主体性の低下

2. 受障(傷)前後の違い への気づきに時間が必要

3. 意思の表出手段 の制限

・生活史からストレングスを探す

- ・障害ではなく「その人」を見る。

・主体性の回復

- ・障害があっても「できない」から障害があっても「できる」という自信の回復。
⇒自律的存在としての復権。
- ・活動・選択肢が広がる環境設定。
- ・内発的動機付け。
- ・自己効力感(役割)の回復。
⇒「患者」から主権者(市民)へ

・気づきを促す支援

- ・体験的プログラムを通して気づきを促す。
- ・価値観の変換。

・意思を表出できる環境・手段の確保

- ・表出手段の確保(「もの」を活用)

個別支援計画による支援 (PDCAサイクル)

インテーク・アセスメント

個別支援計画の作成

個別支援計画の
見直し

PLAN
計 画

DO
実 行

マネジメント
サイクル

ACTION
対 応

個別支援計画に基づく
支援の実施

- ・面談
- ・アセスメント
- ・2次アセスメント
- ・ニーズの確認
- ・支援方法の検討
- ・支援計画会議
- ・再アセスメント

到達度、支援の
有効性等の評価

CHECK
チェック

- ・定期的なモニタリング
- ・個別支援計画の評価

- ・個別支援計画に基づいた支援の
実施及び記録
- ・新たなニーズの発見や
大きな状況変化がある場合は、
モニタリング時期を待たずに
評価・対応に移行

個別支援計画におけるアセスメントの例 ～本人のニーズの把握

「トイレいきます！」～作業中であれば・・・

作業が始める時に毎日言う方だと・・・

トイレに行った後に伝えてくれば・・・

「ねる！おやすみ！」～就寝前であれば・・・

朝出かける前に言うのであれば・・・

昼食後に決まって職員に言ってくるのであれば・・・

「ねつある！」～作業中職員に顔を寄せてきて、しつこく言ってくると・・・

作業が終わり、家に帰る前に言ってきたら・・・

昼食後ご機嫌で笑顔で言ってきたら・・・

個別支援計画におけるアセスメントの例 ～本人のニーズの把握

「4月30日、ヘルパーさんと宮島行ったね。」～実際には行っていないのに言われたら・・・

「ごめんなさい、いたかったね～」と何も起きていない時に急に言われたら・・・

「おしごと！電車！おかあさんといっしょ！」とニコニコしながら言われたら・・・

涙目で訴えるように言われたら・・・

その場面、場面には関係ないことでも、メッセージ性の高いものはたくさんあります。

個別支援計画におけるアセスメントの例

～本人のニーズの把握

急に作業中立ちあがって、体を揺すり出し、リズム感よく唸りながら太ももをたたき出したら...

朝早く起きて、壁に頭を打ち続ける方は...

ご飯を食べていてうれしそうにしていたのに、急に泣き顔になり大きな声を上げ、食器の中のものをひっくり返してしまったら...

想像してみましよう、今の気持ちを！

組立作業が
できない

アセスメントを用いた支援の検討

求められていること
の理解

例: 作業指示の意味が分からない

「求められていること
の理解」のための

支援

手順書、わかりやすい指示など

スキルの有無

例: 道具が使えない

「スキル獲得」
のための

支援

道具の持ち方の指導
作業動作の訓練など

行動に対する意欲など

例: 作業に対する意欲がわからない

「行動に対する意欲を高める」
ための

支援

褒める、報酬を得る
達成量の視覚化など

アセスメント及びサービス提供の環境

個々に合ったサービスが提供されるしくみがあるか？

① マッチング

利用者の適性に合った作業内容か？

とくいなこと

② ステップ

習熟に応じた支援のしくみがあるか？

だんだんと

③ チャンス

試しにやってみることができるか？

これはどうか

社会生活の多様性

- ・交遊関係:友人・集団・利害関係)
交遊関係の比重(生活時間・意識・経費)
- ・地域社会との関係:自治会・近所づきあい・地域の行事への参画(祭り・環境美化・生活関連行事)
- ・地域の変化との連携

- 食生活・栄養管理・食材選択
- 健康管理・疾病管理・防犯
- 安全・地域の防災・危険時対応

- ・住環境:立地条件
- ・地域のまちづくり・生活関連施設等の利便性・バリアフリー・住居管理・設備生活施設・娯楽
- ・施設やサービス機能
- ・暮らし:家事
- ・家政・在宅サービス・基礎自治体のサービス状況

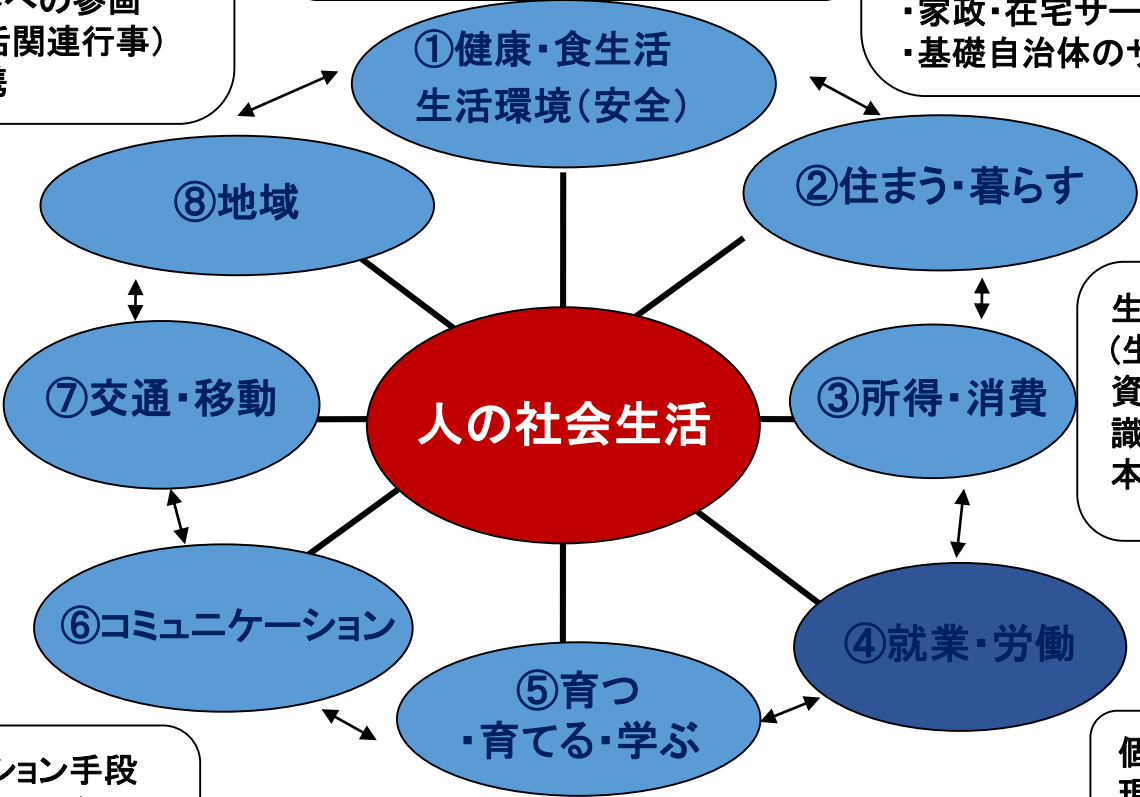
- 公共交通機関
- 利便性・安全性・モビリティ
- バリアフリー

- 生活設計・生活コスト(生活・文化的価値)・財産の保有・蓄財の意識・質向上のための資本投下

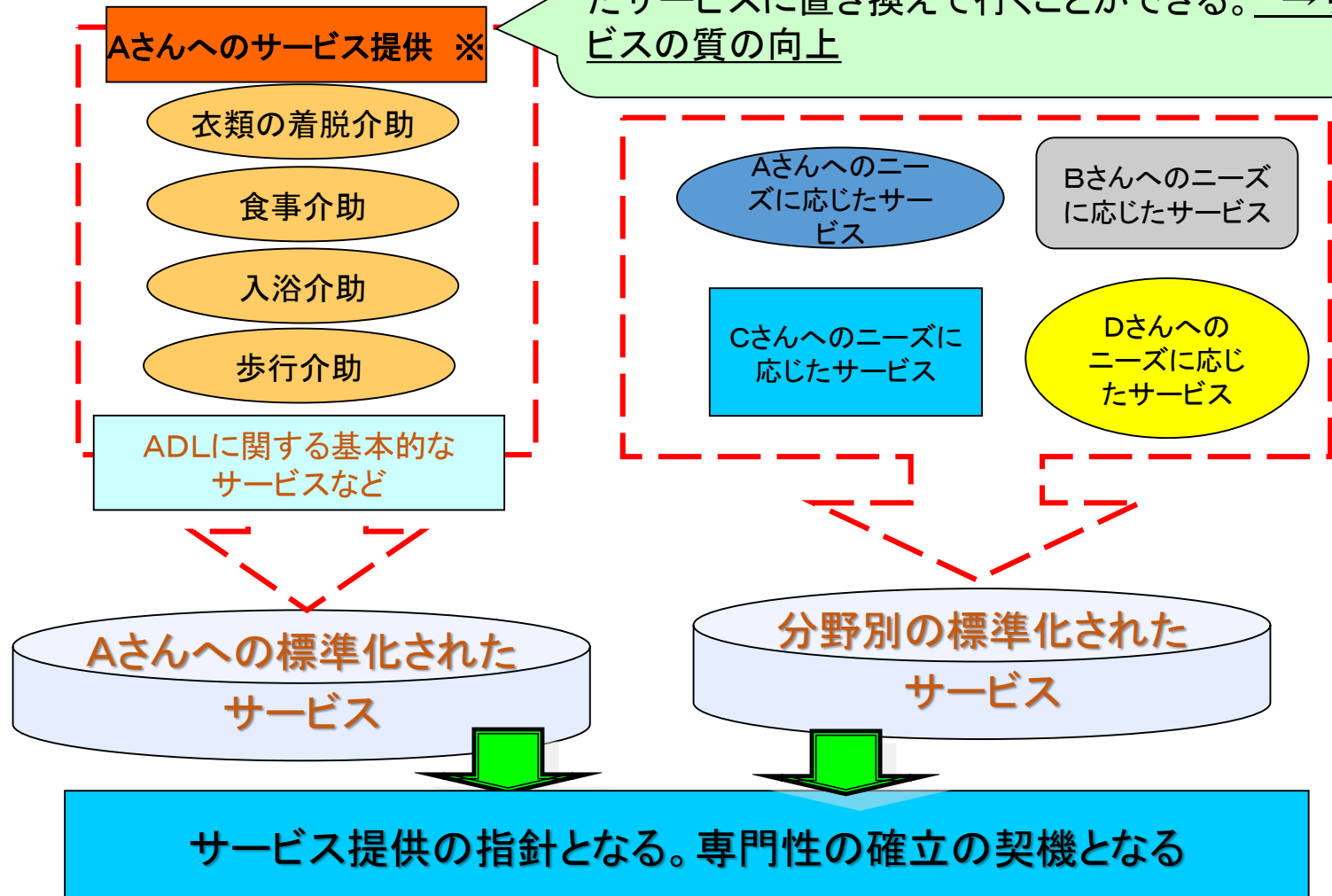
- ・情報取得・コミュニケーション手段
- ・災害対応・緊急連絡システム(誘導案内・危険情報)

- 教育機会・各種関連機関の利便性・啓蒙・啓発活動・伝統文化・教育内容・教育機会など

- 個性の発揮・役割の実現・生計の維持・雇用環境・産業動向



※ 同じようなサービスや複数の人々が希望する個別的なサービスを整理統合していけば、標準化されたサービスに置き換えて行くことができる。→サービスの質の向上



青年期～就労継続支援B型事業所を利用し始めて数年経った時期

事例の状況

- 23歳。毎日元気に通所しているが、事業所が提供する作業にはなかなか集中できない。作業は簡単な部品の組み立てが中心。
- 時折、あくびを連発しているようで、睡眠がとれていないのではないかと感じている職員はいた。
- 一日のうちで、何度か壁に向かって独り言を言っていることがある。
- 朝や帰りの集いの時の挨拶の当番や、休憩時間に皆で唱うときには、いつも張り切って大きな声が出ている。お笑い芸人のギャグをよく披露している。

会議の参加者

- 事業所のサービス管理責任者
- 事業所の職員4名
- Aさん
- 相談支援専門員

計7名

会議の成果

- 相談支援専門員が、事前にサビ管から依頼され、ダウン症の特性について学ぶための資料を準備してもらい、その情報を共有できた。
- 週の後半や登所して間もない時間帯や昼食後の作業ははじめの時間帯に、集中できにくいことが確認できた。
- 一人で作業することより、言葉を交わしながら協働していく内容の作業や、Aさんがはりきって取り組めることを、作業以外も含めて確認できた。

会議の目的

- 個別支援計画の見直し、修正のための所内会議を実施。
- 作業の手を休めていることは多く、作業に集中できないことを強い口調で注意する職員がいる一方で、放っておいたらいいと考えている職員もおり、サービス管理責任者としては、支援の方向性を一度全員で検討する必要性を感じていた。



壮年期～体力や身体機能の衰えが見られ始めた時期

事例の状況

- 47歳。30代の頃には、いろいろな作業に取り組めるようになり、自主的に挑戦する姿が見られていたのだが、ここ数年、徐々に黙りこくって、椅子に座ったまま遠くを見つめているような姿が増えてきた。
- 納品等外に出かけることには以前は積極的だったが、そっぽを向いて出かけることを嫌がる様子が見られ出した。
- 事業所の職員としては、体調が良くないのだろうかと感じることもあるが、時折以前通り張り切って活発に行動する姿も見られるので、考えすぎなのかもと感じている様子。
- 両親は、父親は二年前になくなり、兄弟は他県在住。

会議の参加者

- 事業所のサービス管理責任者
- 身体障害関係の相談員
- 相談支援専門員
- 他の同種別事業所のサービス管理責任者

計4名

会議の成果

- まだ四十代なので、事業所職員としては頭になかったが、他の事業所のサビ管より、老化が進んでいる可能性があることを指摘され、今後医療関係者の意見も聞いていくことになった。睡眠時無呼吸症の可能性についても話題になった。
- 介護予防としての視点を支援の中に取り入れていくこと、そのためにAさんにとって必要な支援であるならば、生活介護の利用や移動支援を視野に入れていくことについて共有できた。

会議の目的

- 相談支援専門員は提供しているサービス全体のあり方について、見直ししていく必要性を感じ、そのためにAさんの状態を共有していくこととした。
- Aさんの現在の様子について、外部の関係者も交えて評価していく。
- 日中支援は、このまま就労継続支援B型の支援だけの提供で良いのかといった検討。



(初期)個別支援計画書(例)

利用者名 _____

作成年月日: _____

事例1
参考

総合的な援助の方針	体力をつけて、できる限り作業能力を向上させて、就労の道を探る。 生活リズムの安定をさせ健康にも配慮しながら、本人が好きなことをして充実した生活を送れるようにする。
長期目標(内容、期間等)	パソコンの経験を活かした仕事をしたいとのご本人のニーズや、学校の教頭という立場で働かれていた経験もあるので、様々な可能性を高め、ご本人に適した職場で一般就労し、充実した生活が送れるようになっている。(2年)
短期目標(内容、期間等)	これまで外出の機会が少なく、体力的に落ちていることもあるため、まずは、週3回の事業所通所が問題なくできるようになる。(3ヶ月)

○支援目標及び支援計画等

支援目標	支援内容 (内容・留意点等)	支援期間 (頻度・時間・期間等)	サービス提供機関 (提供者・担当者等)	優先 順位
体力の向上、一日のスケジュールを疲労なくこなし、週3回通い続けることを目指す。	疲労度をチェックしながら、一日のスケジュールを徐々に伸ばし、体力が向上するよう支援します。	週3回 10:00~16:00 3か月	就労支援センター△△ (就労移行支援事業所) 担当:○○	1
パソコン入力について、集中力・耐久力がつけ、少ない疲労で一定の速度で入力を目指す。	確実な入力と、速度向上を目指し、片手(左手)入力の練習を行います。結果をフィードバックしながら動機づけを維持できるよう支援します。	週3回から開始し頻度を増やしていきます。 10:00~16:00 6か月	就労支援センター△△ (就労移行支援事業所) 担当:○○、××	2
会話でのコミュニケーションが少しずつとれています。関係機関との連携を図り、継続的に実施します。	ご本人の同意の下、言語療法の状況や日常生活の過ごし方等を把握させていただきます。相談支援事業所等のサービス担当者会議へ出席し、総合的な支援方針を常に共有しながら支援します。	随時 6か月	通所リハST:○○ ○○総合病院 担当:○○ (居宅支援事業所○○)	3
送迎等を利用し、通所を継続します。徐々に、交通機関の利用を目指します。	行きはボランティアによる支援、帰りは当センターの送迎車を利用し、安心して通所できるよう支援します。公共交通機関の利用も徐々に同行し支援していきます。	週3回、3か月 公共交通機関は3か月後から徐々に試行	就労支援センター△△ (就労移行支援事業所) 担当:○○、●●	4

すぐできること

×年齢に合わせた声かけ

発達のレベルに合わせていくことも時には必要なのですが、基本は生活年齢です。

×普通の語らいを！

- * ゆっくりわかりやすくではなく、普通に！
- * 声のトーンはやわらかい方が良く、元気いっぱいの大きな声はかなりしんどくなる方が少なくありません。
- * 本人の関心のある話題を！新聞雑誌や、インターネットを利用し、動画や写真を見せながら、「すごいですね」「やさしいね」「よかったね」といった話をする機会はあるといいですね。
- * 相手の目を見て、話しかけて下さい。視線を合わせてこないことに支援者がこだわらないようにしましょう。
- * 声をかけられすぎると、疲れます。もちろん、ずっと黙っている、全く他のことをし続けるというのは、混乱の元です。（「ごめんね、金丸はおパソコンの仕事をやってもいいですか？やらせてくださいね。」などと事前に断ることは、必要なことです。）

すぐできること

● **かみ合った会話を！**

- * うなずいてもらうこと
- * 「うん！うん！」「なるほどですね！」「そうなんですね！」
- * わかってあげようなんて考えないで下さい。奇声にしか聞こえない声に対しても、「そだね～！」などと反応することは時に必要です。

● **穏やかな表情で声をかけましょう**

- * わからないときに、眉間にしわがよりませんか
- * 音声の前に、視覚的な情報が邪魔をすることがよくあります
- * ただでさえ、スタッフが言っている言葉がわからずに緊張しているのに、必死の形相で伝えようとするとテンパってしまいます
- * 声をかけなくても、作業を一緒にしている時に、穏やかな表情を心がけていくのはプロとしての流儀です。

すぐできること

・「見える」工夫はとても有効です



- * 写真・絵カードは必要なきに見せていくと、よく伝わります。特にどこまでやれば終わりなのかは、その人が理解できる内容で示していきましょう。
- * ジェスチャーを使うことでよく伝わることもあります
- * でも、時には混乱のもとにもなります(いけないこと、改めてほしいことを写真・絵カードでしつこく示した時に、混乱していくことが多くあります。成人期では、基本的に「ありがとう」「ご苦労様」と声をかけることを目的に行っていくと良いと思います。)
- * 上手に使うと、混乱のもとを取り除けます。



すぐできること

×ご家族の方からの情報のさらなる入手～わくわくするような刺激とは？

*好きなこと、関心のあることは少しでも多く知っておくことは大切です。

・好きなグッズ・玩具・スポーツ

・観ることで満足できることはたくさんあります。

観戦、車窓、発着、ビデオ、工事現場、
ウツリと眺める(水の流れ、回転、キラキラする物、
饅頭製造器、時計、水槽、落ち葉、信号機・・・)

・聴くこと、触れること、臭い(香り)、味わうこと

*わくわくするということは、元気のもとになります。ただ、興奮の元にもなります。

*わくわくするということは、スイッチを入れてもらいたい場面の前に
行くと上手くいくことが増えます。

すぐできること

×ご家族の方からの情報のさらなる入手～落ち着いてくる刺激とは？

* 安定できる場所、安定できる刺激（就寝前にどんな儀式をやり、どんなものを観たり、聞いたりしているかなどの情報は知っておきたいことの一つです。病院の待合室でのご家族の工夫、YouTubeの動画で何を見ているか、などはチェックしておきたいことになります。）

- ・静かなところは？
- ・にぎやかなところは平気？
- ・歩き回ることが休憩？ベンチに座った方がいい？
- ・どこに触れられると落ち着く？その強さは？
- ・ipodは有効？デジカメは？
- ・音楽は有効？

すぐできること

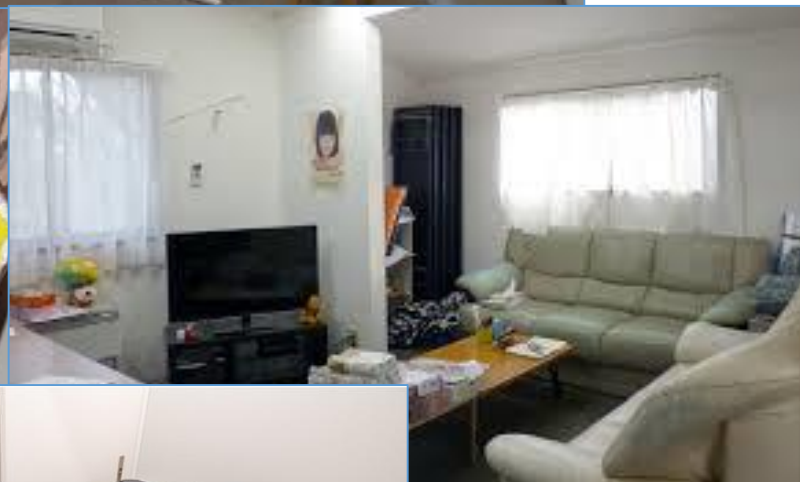
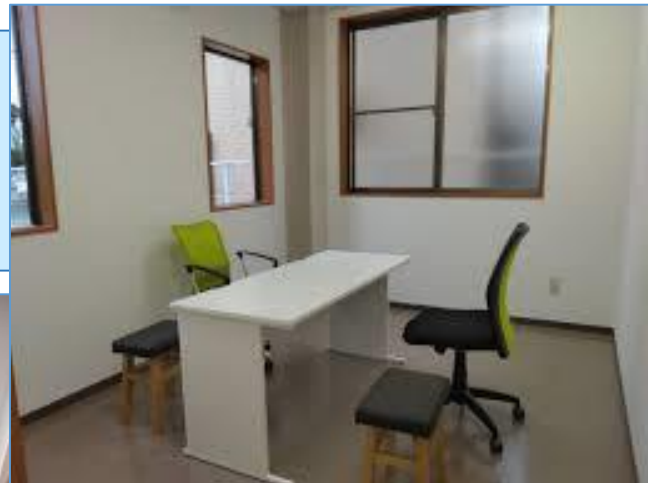
・ご家族の方からの情報のさらなる入手

- ・ご家族の方からの情報は、だれが、いつ、どこで、どのくらい、どうだったのかをメモしながら聴きましょう。(このところ不安定だ！という言葉も、正確に聞き取ると、以前と変化はないという結論になることがよくあります。)
- ・そばにいる人によって、好みも関心も、安定できる刺激も変わります！
- ・「一度私と試しに経験させて頂いても構いませんか？」
- ・支援内容は、当事者と支援者で決めていくもの(支援目標は、長くても半年のうちに結果を出すこと！障害があるから目標を達成できないのではなく、目標の設定の仕方が不適切だから達成しないと考えましょう。)

環境としての工夫



環境としての工夫



環境としての工夫

一人あたりのスペースは？基準では示されていませんが、保育所の遊戯室で、一人当たり畳二畳分が基準です。大人の場合は、自治体によって違いはありますが、やはり二畳弱になります。

個別のスペースは、なかなか作れるものではありませんが、個別に過ごせる場がもし二部屋あれば、職員一人分の仕事が減るくらいの効果がありますので、長い目で見れば安いものです。

みんなで仲良く過ごしていくのを目指していくのが、従来の共同作業所が目指したことでもあるのですが、自閉スペクトラム症の人や、過敏性が常に高い人にとっては、少しの間みんなと過ごすために日常的には一人で過ごす空間があると、随分と達成感が得られます。

障害者への支援とは？

- ☆生活リズムが整っていないければ、まずはそのリズムが安定してくるまで、ていねいに(長期的に)、一対一のコミュニケーションを重ねていく。(本人の体調に合わせ、一緒に同じ空間で過ごす機会を、定期的に持つことを目指す。そこでは、本人が少しでも関心があることを見つけていくことが大切である。)
- ☆障害のある本人に信頼されることが、目指すべき最初のゴールである。信頼されているかどうかは、リラックスした視線を示してくれるかどうかであり、支援する側は温かいまなざしをかけ続けることが何より重要である。
- ☆本人が自信を持って取り組めることを一つでも多く見つけ(飽きずに集中できることであれば、OK!)、その成長と変化について、周りが一人でも多く気付いて評価していく仕掛けをしていく。

障害者への支援とは？

☆できること、得意なことを深めていく過程に、必ずできないこと、苦手なことが待っているのであり、できないこと、苦手なことの克服を優先していく必要はありません。

☆先々困ることになるから、教えておかなければならないと支援者が考えるより先に、ご本人が前向きになれる取り組みについて考えていきたいものです。

☆こうしてはダメ、こんなことはいけない！という情報だけを教えるだけだと、混乱してしまい、また同じ失敗をしてしまうものです。禁止、否定をした後で、どうすればいいのかを、落ち着いた表情でわかりやすく示していくことが大切。

障害者への支援とは？

☆支援する側に非はないものの、その人の失敗に対し、「ごめんなさいね」「わるかったですね～」「私がみていなかったからですね～」「伝えていませんでしたよね～」(内罰的な関わりと言い、子育ての基本です！)などと、支援する人自身が、自分が悪かった！という表現をしていくことは、その人を愛おしく、思っているからであり、そうした支援者の日常的な言葉こそ、信頼関係に結びついてくるものです。

☆学童期における支援と、成人してからの支援とは、卒業が明確にあるかどうかという点で、大きく違ってきます。成人してからの支援は、共に暮らすという視点を持たなくてははいけません。暮らしであるからには、どちらかが指導的である必要はありません。そこで支援者に求められるのは、できないことを受け入れることと、長期的かつ訓練的な関わりを避けることです。(短期間で間違いなく効果が期待できることは、がんばる！)

気になる行動については、以下のように整理していきましょう。

気になっている人は？		困っている人は？	
気になっていない人はいるのか？		本人は困っていない時間帯があるのか？	
なぜ気になるのか？			
支援者はその行動をどうしたいのか？			
その行動は以前と比べてどう変わっているか？			
その行動により誰が迷惑なのか？			

寄り添い合い、からみ合い、つながる！

障害を受容し、障害の克服と改善をご本人とご家族の目的としてしまっているのは、結局のところ堂々巡りをしている、その場しのぎの支援をしてしまうことになることを感じています。まじめに訴えを受け止めて、深刻に悩みや不安を考えていても、ちっともおもしろくないし、なんてつまらないアドバイスを私はしているのだろうって、後で感じてしまうことが多くあったことも事実です。一方で、単なる興味本位から、相談の対象となる方のこれまでの歴史や、感じてきたことを少しでも知ろうとし、その紆余曲折に驚き、今の姿があるべきにして「在る」にいたったことに感銘しただけで、何も支援していないし、何の助言もしていないのに、「肩の力がスーッと抜けました。」「もう頑張らないでいいことがわかりました。」「今まで通りでもいいんですね。」と笑顔になっていく方に、多く出会いました。

寄り添い合い、からみ合い、つながる！

「自閉症の子があなたに知ってほしいこと」という本(エレン・ノットボム著 和歌山友子訳 筑摩書房)本の「はじめに」に、ニューヨーク・タイムズ紙の記事で、アスペルガー症候群の高校生ジャック・トーマスさんの主張を紹介しています。「**僕たちは病気ではないから、“治る”** ことはありません。これは僕たちのあり方なのです。」また、その著者は本文の中で、『自閉症はただ特徴の一つでしかないってということなんだ。それだけでどういう人間か決まるわけじゃない。』といったメッセージを、自閉症でもある子どもを持つ親の立場から書いています。

寄り添い合い、からみ合い、つながる！

ジャック・トーマスさんは、障害の部分は僕の一部であり、そこに注目するのではなく、僕自身を見て！とも言っているのでしょう。頑張らせない支援の在り方を考えていくことはもちろんのこと、苦しみやしんどさに寄り添いながら、人と人としてからみ合い、つながっていけるように、のんびりとした気持ちでいたいものです。そして、苦しみやしんどさを感じているということこそ、生きていることを実感する時であり、前向きになっていくための大切なエネルギーに変わっていくものと信じつつ、「障害」と言われる機能や、困難な出来事もぜんぶ、受け止められる大きな器（街）を作っていきたいものです。